



月刊部品新聞

2006年6月
第8号

編集・発行 Unit

スポーツコーチサミット

5月18日19日に国立オリンピック記念青少年総合センターで平成18年度スポーツコーチサミットが行われました。

文部科学省とスポーツコーチサミット実行委員会が主催し、開催趣旨は「我が国の国際競技力の向上を図るため、競技者の育成・強化にあたるコーチスポーツ医・科学研究者および各都道府県のスポーツ行政担当者などが一堂に会し、それぞれの分野における成果や諸課題について研究協議や情報交換を行うとともに本サミットを通じて相互の理解と連携を深める。」ということ、全国から競技種目を問わず、412名の参加者がありました。

初日第一部

「トリノオリンピックを振り返って」という題名で選手団団長の遅塚研一氏の講演に続き、シンポジウムが行われました。

遅塚氏の講演の中で気になった部分は、日本代表としての特定競技選手の生活態度が目に余ったということと、競技種目によつて目標がバラバラであったということでした。

とくに後者はメダルを独占することを目標としている種目と、参加が目標となつている種目とあり、今後は

戦う選手団として参加が目的ではなく、好成績を出すことを目標とした選手団の構成に移行していくべきであるという部分でした。

その後のシンポジウムは私の元上司でもあり、トリノオリンピック本部役員の村里敏彰氏をコーディネーターに迎え、アルペン、フリースタイル、スピードスケート、ショートトラックの4名の監督コーチがそれぞれの種目における状況の話を展開しました。

しかし、各種目の技術論や、戦術論の反省点が多く、今後の展開など積極的な話があまりなかつたことは残念でした。そのなかでも共通の意見として出ていたものは、環境の整備と指導者の強化に集約されていた。

特に冬期スポーツは技術トレーニン環境としてナショナルトレーニングセンターを設置するとう部分に関して夏期スポーツよりも場所の確保や運営が難しく、今後の課題とも言えるでしょう。

そういった中でスピードスケート監督の鈴木恵一氏はメンタル面について「負けて悔いが残らないという選手がいるがなぜだ。」と「オリンピックが楽しかったのはなぜか。」たしかに、勝負の世界で負けて悔いが

残らないというのはあり得ないと思うし、試合をして楽しかったというのレジャーのレベルの話ではないだろう。

私は対応するマスコにも問題があると思うが、遅塚氏がいつていた「戦う選手団」では決してなかつたという部分につながるのではないかと思う。

また、ショートトラック監督の川上隆史氏はコーチの仕事は選手を作るのではなく、人格形成も含め人間を作っていくと主張されていらないと主張されてい

た。確かにそれが抜けると日本代表の競技者としての自覚もなく、成績が出ればすべていいというようになってしまふであろう。

初日第二部

「世界から学ぶべき海外での経験を生かしたコーチング」という題名で田嶋幸三氏をコーディネーターとし、全日本柔道連盟男子強化コーチの岡田弘隆氏、日本スケート連盟強化副部長の青柳徹氏、野州高校サッカークラブ監督の山本佳司氏という海外留学経験のあるパネリストで展開されました。

- この中でキーワードとなつていたので、
- ①世界基準
 - ②競技間連携
 - ③若手育成

の3点でありました。まず各パネリストのプレゼンテーションに始まり、ディスカッションという流れでした。各パネリストの話は海外留学の経験があるからこそ話ができる内容で、聞いていても共感できる部分がたくさんありました。

例えば柔道の場合、日本は技術を身につけて試合に臨むが、海外では戦術を身につけて試合に臨む。

日本人競技者が負けた場面を解説していましたが確かに外国人の競技者は戦術で試合を決めていました。しかし、日本人競技者が試合を決めていた場面は技術力の差がものを言う場面ばかりでした。

また山本氏の発言の中に「世界の高校生は国内の大会を目標にしていない。」という内容がありました。たしかに、日本の場合は全中やインターハイなど国内のトップになることが目標となりがちです。それでは世界で戦える人材を育てることは難しいのではないのでしょうか。

二日目

二日目は4つの分科会が開催されました。私はその中で一環指導システムの構築の分科会に参加しました。

内容はオリンピックにおけるメダル占有率を向上させるために、ジュニアや一般の人も含めた中からいかに優

れた人材を見つけ出し、強化していくかというもの、またそのシステム作りというものでした。

具体例として全日本卓球協会の取り組みと神奈川県卓球協会の取り組みが紹介されていきました。

ちよつと気になったところはシステム作りが競技者に向かつていることはいいのですが、それを育てるコーチの能力向上も必須ということでした。

それができなければ世界に通用する競技者を育成することは難しいのではないのでしょうか。

1日目の田嶋幸三氏は次のように締めくくっていました。

「指導者が変わらなければ選手は変わらない。」

Unit代表 澤野 博(さわの ひろし)

日本体育大学卒。社会人経験を経て欧州へ留学。乳酸を中心としてトレーニングを幅広く学ぶ。帰国後、部品となって選手を支えるという意味で「Unit」を設立。競技種目、競技レベルを問わずトレーニング指導を中心に活動。医療系国家資格の臨床検査技師の資格を持つ異色のトレーニングコーチ。
ご意見、ご要望、仕事依頼、お問い合わせは下記まで。
0422-34-5055(Fax 兼用)、090-1999-2845 または unit@mbd.nifty.com